



動物から見た世界に 思いを馳せる

新潟国際情報大学情報文化学部 講師
伊村知子 (いむら ともこ)

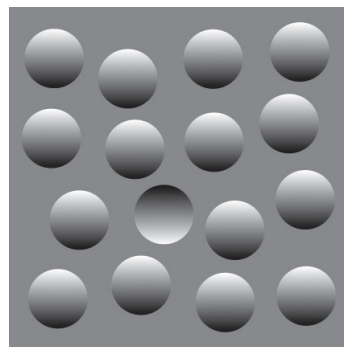
さる2014年8月23日に日本心理学会主催の「高校生のための心理学講座シリーズ」が新潟大学中央図書館ライブラリーホールにて開催されました。当日は、心理学史、比較心理学、発達心理学、社会心理学、計量心理学の五つの分野の講義が行われ、参加者が心理学についてこれまで抱えているイメージと比較しながら聞いてもらいました。講座後のアンケートには、心理学に対する印象が変わった、心理学にはさまざまな分野があることがわかった、心を科学として扱うことの難しさに興味を持った、などのコメントが寄せられ、企画者や講演者の意図は参加者にもおおむね伝わったのではないかと思います。私は比較心理学の講義を担当させていただきましたので、以下本稿では、当日の講義の内容を紹介させていただきたいと思います。

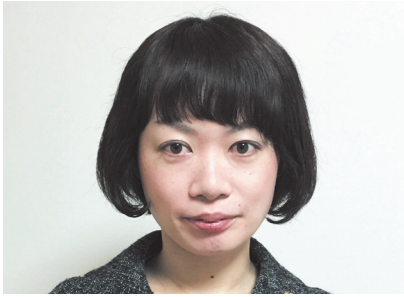
私の講義のテーマは「チンパンジーからヒトの心を探る」というものでした。チンパンジーとヒトのものの見方の共通点と相違点について具体例を挙げながら、ヒトが現在のような心のはたらきやしぐみを持つようになったのはどうしてなのか、ヒトの心の特徴とは何かという問題について考えてもらいました。

まずは、実際に心理学に関する簡単な実験を体験してもらいながら、実は私たちは自分が思っているほど自分自身の心のしぐみを知らないことに気づいてもらうとともに、同じ実験に対してチンパンジーがどのように振る舞うかを見ることによって、心のなりたちを目に向けてもらいました。

たとえば、私たちがふだん見ている世界は、

実は私たち自身が作り出した幻であることを「かげ」を手がかりに立体的な形を知覚する実験によって体験してもらいました。まず、白黒の濃淡のついた円をいくつか並べたものをスクリーンに提示して(下図)、上側が明るくて下側が暗い円はふくらんで見え、逆に上側が暗くて下側が明るい円はへこんで見えることを確かめました。次に、頭を真横に傾けて、同じ円をもう一度よく観察しました。すると、最初の観察ではふくらんだり、へこんだりして見えた円が、今度はどちらもふくらんでいるように見えることに気づきます。頭を傾けることによって物理的には白黒の濃淡の方向が変化しただけなのに、私たちには全く異なる形として知覚されることを確かめてもらいました。そして、私たちが単なる白黒の濃淡のパターンを「かげ」とみなすことで平面にも立体感を感じることに、さらに、光が上から当たっているように見える白黒の濃淡のパターンを見たとき、すばやく立体的な形の違いを知覚するしぐみを持っていることを体験してもらいました。このような簡単な実験から、私たちのふだん見ている世界は、外界からの情報をありのまま取り込むのではなく、「光は上から」という前提で作られたもの





Profile—伊村知子

2006年、関西学院大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程後期課程修了。日本学術振興会特別研究員（PD）、京都大学霊長類研究所比較認知発達研究部門特定助教、京都大学霊長類研究所思考言語分野特定助教を経て、2012年より現職。専門は比較認知発達、知覚心理学。

であること、私たちには、必要な情報をすばやく処理するための「ショートカット」のようなくみがあることを説明しました。

また、このような「前提」に基づいたものの見方を、私たちはいつ、どのようにして身につけたのかという問題を提示して、ヒトの赤ちゃんやヒト以外の動物との比較から、私たちの心のなりたちを知ることができることを説明しました。そして、ヒトに最も近縁な動物であるチンパンジーの赤ちゃんが、白黒の濃淡のついた、ふくらんで見える円とへこんで見える円に対してどのような行動を示すかという実験のようすを映像で見てもらいました。映像では、チンパンジーの赤ちゃんが、ヒトの赤ちゃんと同じように、へこんで見える円よりも、ふくらんで見える円のほうに触れることから、ヒトやチンパンジーの赤ちゃんにも「かけ」を手がかりに立体的な形を区別する能力があり、ヒトのおとなのような「前提」に基づいたものの見方をすることを確認してもらいました。このような実験の結果から、必要な情報をすばやく取捨選択するためのくみの一部は、ヒトだけが身につけた特別なものではなく、チンパンジーにも共有されているものだということを説明しました。

一方で、見たものを記憶する能力には、チンパンジーとヒトで違いがあることを映像で紹介しました。この実験では、1から9までの数字がモニタ上に提示され、1という数字に触れると他の数字が消えて白い四角に置き換わります。記憶をもとに、2から9があった場所を小さい数字から順番に触らなければなりません。参加者にも実際にこの実験に挑戦してもらいながら、チンパンジーの5歳半の子どものほうが、ヒトのおとなよりもすばやく正確に答えられる

ことを確認しました。また、最初の数字に触れるまでの時間も、チンパンジーのほうがヒトよりもすばやく説明しました。そして、チンパンジーは見たものを見たものとしてそのまま記憶するのに対して、ヒトはそれが何であるかを記憶すること、こうした記憶の仕方の違いは言語とも関わりがあり、ヒトは言語を獲得した代わりに、見たままのものとして知覚し記憶する能力を喪失したという仮説（松沢、2011）があることを紹介しました。このような実験から、ヒトとチンパンジーのもの見方には、共通点ばかりでなく相違点もあることを説明しました。参加者からは、ヒトも子どもの頃から訓練すればチンパンジーと同じ結果になるのではないか、などの意見も寄せられ、ただ受け身でこちらの話を聴いているのではなく、参加者なりに講義の内容について考察しているようすも垣間みられました。

最後に、寄せられたアンケートを見ると、動物を通してヒトの心を調べることができるということ自体が参加者には新鮮に感じられたようでした。今ここにいる私たちの心ではなく、同じ地球上の別の場所で暮らす動物の心に思いを馳せ、心について考えることは、たしかに参加者にとって初めてで予想外の経験かもしれません。これからも、特別な知識がなくてもわかるような言葉で、自分自身の身体を通して心理現象を体験してもらうことを心がけながら、これまでの研究で得た実感をもとに心理学の魅力を伝えることができればと思います。

文 献

松沢哲郎（2011）『想像するちから：チンパンジーが教えてくれた人間の心』岩波書店